

白拍子伝説の特性とその一考察

内藤 浩誉

一 はじめに

中世という激動の時代を映し出す軍記物語。そこで描かれる当事者たちの躍動的な生き方、人間関係や恋愛に伴う普遍的な心理は、時を超えて今なお、人々の心に響いてくる。ゆえに、語られ、あるいは読み継がれ、演劇や絵画にまで格好の題材を提供してきた。人々を魅了する物語は、後世である現代においても身近な存在として知られ、とりわけ『平家物語』は、不動の人気を博す日本を代表する文学である。平清盛を始めとする人物像と彼らを取り巻き織りなされる悲喜こもごもは、興味深く取り上げられてきた。中でも注目したいのは、「白拍子」の話題である。

白拍子とは、元は雅楽の拍子の名である。そもそものは、延年の場で童などによって謡われた素の声による芸能自体を指した。が、平安末期頃から男装姿の女性芸能者が登場し評判となるや、芸能を演じる者、つまり人物を示すようになる。この芸能者たちは「今様」という当世歌謡や朗詠などを謡い、また舞をした

が、宴席で天皇や貴族・武家に侍り、時には寵愛を受け所領を知行された者もいる程であったため、室町時代には、色を売る遊女と同義で捉えられるようになった。しかしそれでも一方では、その芸態は曲舞や能へと受け継がれたので、中世という時代を物語る上で重要な存在と見なされている。このような、平安から鎌倉期にもてはやされるも忽ち変容した中世を代表する白拍子の、隆盛期にあたる様相を垣間見ることができなのが、『平家物語』や『義経記』に登場する名うての白拍子たちの姿である。悲恋のヒロインとして語られる彼女たちもまた、注目を浴び、様々な文芸に影響を与えてきた。

全国各地に目を転じてみると、そのような白拍子の名を語る伝説が数多く点在することも、興味深い。一芸能者が場所や時を超えて伝えられ、今なお残っていくという事象は一体に、民間の人々にとってどのような存在であるからなのだろうか。

白拍子研究は従来、次のような傾向に大別できよう。すなわち、①歌舞などの実態や演じられる場、男装という異装性、白拍子

芸の源流や影響関係など、芸態や実像②聖俗性、王権との関与などの社会的地位③文学・演劇での描写や表現などの文芸性等を追究するものである。いわば、白拍子そのものに対する注意や着眼が多かった。しかし他方、もてはやしてきた人々がどの様に受容してきたか、という視点については、あまり注目されてこなかったようである。享受する人々の間で醸成された物語、つまり伝承から見出されるその存在の役割や意義、取り巻く諸相が照らす本質もまた、白拍子の実態を解明する一端を担うと考えられるにも関わらず、である。

白拍子説話群の特色を俯瞰することは、白拍子像の側面や特質を鑑みる素材となるであろう。今回は、静岡県磐田市の白拍子伝説の事例から、地元での享受から窺える「白拍子」像の特性とその研究の可能性について、考察したい。

二 全国の白拍子伝説

まずは、全国に点在する「白拍子」に関わる伝説を見ていこう。その特色は、二つに大別できる。すなわち、字名など「地名」として白拍子を冠するもの。次に、軍記物語で描かれた悲恋物語に連綿する女性たち「人物」に付随するものである。(表1) 前者の「白拍子」地名を有する伝説のそれぞれの詳細や考察は別の機会に譲るが、ここでは共通事項として見出せる特色についてのみ指摘しておく。それは、多く水辺、殊に川沿い、低湿地や谷に側している点である。そしてそのいくつかは、氾濫の経歴

〔表1〕《地名》

場所	地形	伝説人物
新潟県 糸魚川市大字能生字白拍子	川の蛇行	
岐阜県 大垣市上石津町上多良 字城屋敷白拍子谷	牧田川の氾濫	
静岡県 磐田市白拍子	天竜川氾濫原・狭い地域	千手前
愛知県 東海市加木屋町白拍子 豊橋市石巻本町白拍子	太田川氾濫原・狭い地域 紙田川・二股地	落人
三重県 上野市治田白拍子	滝	静御前 後醍醐天皇女房
山口県 長門市三隅上字白拍子	谷	
熊本県 山鹿市南島字白拍子 球磨郡錦町西字白拍子	菊池川氾濫原・狭い地域	
宮崎県 宮崎市村角町白拍子	新府川・農業用水(池)	
〔人物〕		
祇王	平清盛の寵愛を受けるも、仏御前(滋賀県野洲町)の登場で、京都嵯峨野(妓王寺)に隠遁する。 〔農業用水〕	義王寺・妓王井川 真福寺
仏御前	新参者ながら清盛の寵愛を受けるが、嵯峨野で祇王たちと往生した。 〔福井県大野市〕滝 〔石川県小松市〕持仏・墓 〔兵庫県神戸市〕真福寺	
静御前	源義経の愛妾。母は磯禪師(徒然草)二二五段・白拍子起源説。 全国四一箇所伝説が存在する。その特色は、東日本型・西日本型に大別できる。 〔群馬県前橋市〕供養塔 〔兵庫県尼崎市〕化粧井 〔香川県高松市〕墓・宝池(農業用水) その他	幕 化粧井 幕・宝池(農業用水) その他
亀菊	後鳥羽上皇の寵姫。摂津国長江・棕橋荘の領家職を与えられる。承久の乱(一二二二)は、上皇が面荘の地頭職罷免を鎌倉幕府に要求するも、拒絶されたことが一因と言われる。 〔大阪府豊中市〕棕橋荘・出世亀菊稲荷社 〔島根県隠岐島〕亀菊墓	棕橋荘・ 出世亀菊稲荷社 亀菊墓

が確認される。水に苦しまされる地勢は、裏を返せば肥沃な地といえよう。かつて農業・稲作をしていたという話も聞かれ、中には農業用水に「白拍子」の名称が関わっている用例も見られる。

こうした「水」とのつながりは、後者の人物にまつわる伝説にも関わっている。固有名が付されていない事例もあるが、具体的な人物として挙げられるのは、平清盛の寵愛を受けた祇王や仏御前、源義経の愛妾・静御前、後鳥羽上皇の寵姫・亀菊等である。殊に静御前の伝説は全国四十一カ所にも上り、静御前説話群と括ることができよう。また、地名ないし静以外の白拍子伝説は、主に中部・北陸・近畿で集中しており、形成されていたであろう白拍子文化圏が透かし見えるようで、興味深い。今後の課題にしたいと思う。

さらに意味深いのは、水辺に付随する白拍子伝説のいくつかは、治水造営に関わる点である。滋賀県野洲町には、次のような話が伝わる。当地出身の祇王は平清盛に望みを訊かれた折、水飢饉に困っている故郷の為に用水を願った、という。そこで造られたのが、「義王井」である。ここでの祇王は人々から偉大な女性と賞され、水を司る神に重ねて認識されている。また、兵庫県神戸市に目を転じると、清盛による築島造営で犠牲になった民を弔うため祇王が開基した寺が、真福寺という。今は廃寺となったが、ここに建てられた祇王祇女の塔は、松王丸人柱伝説の伝わる来迎寺（通称・築島寺）へ移築されている。

このような治水や鎮魂の要素は祇王に限ったことではなく、静

御前伝説にも窺える。群馬県前橋市の静御前供養塔には、利根川で命を落とした人たちを供養する意味が付されていた。また、香川県高松市では、宝池という農業用水を造営する折、静の墓を埋めたという古老の言い伝えがあり、実際決壊しそうな場所から他とは異なった石が出てきたという話が聞かれた。静御前に寄せた心情には、「静（しずか）＝シヅメ」の効果を期待する様子が見えるのである。これと同じようなことは、実は水を司る特色が窺える白拍子そのものにも当てはまるのではなからうか。

白拍子を歴史的事実に照らしてみると、王権と結びついた代表亀菊は、後鳥羽上皇より椋橋庄（現・大阪府豊中市）を所領として与えられた。アルキ白拍子として廻国する者もいた白拍子だが、やはり交通の要衝との接点は見逃ごせず、当地は事実、水上交通の要衝の地であり、遊女や白拍子の集う場だったとされている。さらに、川向こうは兵庫県尼崎市、いわゆる神崎の地である。「遊女塚」という入水した遊女を記念する碑は、現在でも当地の面影を垣間見せる。さて、この椋橋庄であるが、狭く蛇行する猪名川が度々洪水を起こした故、穀倉地帯となった土地である。亀菊所領の機縁であり、鎌倉幕府との争いが承久の乱を引き起こす原因にもなった背景にあたる。この肥沃をもたらす氾濫の地では、自ずと治水が重要となってくる。実際、亀菊にあやかって造立された出世亀菊稲荷を弊社にする椋橋総社には、用水造営を手がけた行基を助けたという鯉の伝説が今なお伝わる。

このように、土地の歴史・風土を基盤にし、時には影響され

る伝説の、白拍子に関するそれらはたいいて、権力との繋がりとともに、水辺にまつわる特徴が挙げられる。伝説内容は、文芸作品での挿話に沿いつつも、地域ならではの展開をみせるが、それでもなおお水・治水との関与が浮上する点は、注目すべきであろう。水を司る存在、あるいは聖水信仰を根底に擁する女性「白拍子」の役割が想定されるのであるが、それでも如何なる背景がこのような一見芸能とは関係のない内容を生み出すのだろうか。その意義は、果たして何であろう。

三 静岡県磐田市の白拍子(千手前) 伝説

白拍子伝説の取り巻く環境は如何なるものなのか。また、地元民のどのような心情に基づいて、伝説は享受されているのか。具体的に、静岡県磐田市字白拍子の伝承から捉えていく。

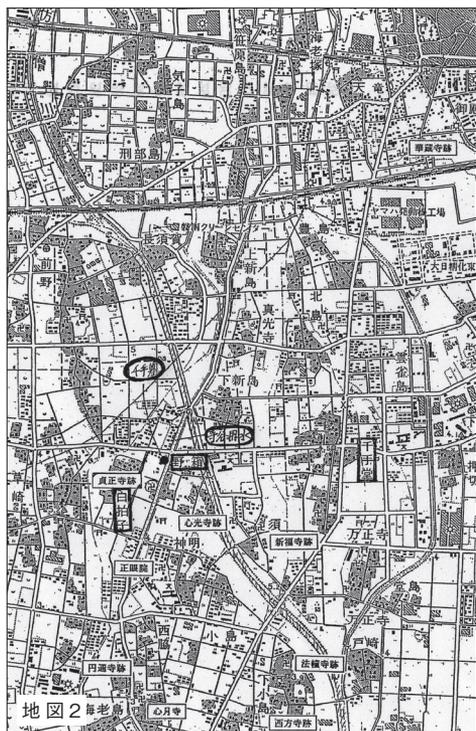
当地で白拍子といえ、それは「千手前」を指す。千手前とは、源平合戦の最中に南都東大寺を焼き払った平重衡との由縁で語られる女性である。罪に問われた重衡が鎌倉に護送された際、源頼朝の配慮で遣わされ重衡を慰勞したとされる。その時の様子については、『吾妻鏡』⁽¹⁾、『平家物語』⁽²⁾、『源平盛衰記』⁽³⁾などに詳しく、またこれらの話を基に謡曲「千手」は作られた。

さて、千手前であるが、『吾妻鏡』元暦元年四月廿日条では「官女」、『平家物語』『源平盛衰記』では「街道・宿場の娘」とされ、そもそも芸能者という明記はない。が、磐田での彼女は「白拍子」と称されている。これは、重衡をもてなす宴にて琴を弾き、

朗詠や今様、白拍子を謡ったという記述から、音曲に長けた者と見なされ、連想されるに至ったのであろう。史書・文学では、重衡を恋慕して亡くなった、あるいは菩提を弔ったとされている千手前であるが、地元では、当地を故郷とし、⁽⁴⁾あるいは重衡と別れた後に、同じく平家の公達との恋愛物語を繰り広げた池田宿の熊野御前を訪ねて磐田まで来た、との言い伝えが残る。⁽⁵⁾

当地は、上代に遠江国の国府が置かれ、また東海道の発達で多くの旅人が往来した。殊に天竜川を渡る人々にとって池田宿(現・豊田町)は、重要な逗留地でもあった(地図1)。さらに、池田庄は京都松尾神社の寄進系荘園にあたり、都との関わりが強い。このような地に女性伝説が根付くのも、その特性にふさわしい環境があるからであろう。

千手前伝説は、中近世に中心地として栄えた見附の南西に位置した遠江国磐田郡白拍子村・野箱村・千手堂村の三方所(現・長野地区)に点在する(地図2)。旧・坊僧川上流域右岸の沖積平野一帯(海抜二二・二五⁽⁶⁾)である。白拍子と野箱はそれぞれ、千手伝説による地名由来がある。⁽⁶⁾それは、千手前が居住し亡くなったので、白拍子村と名付けられた(此処から京に上って白拍子になった人がいた、という別説もある)。また野箱は、千手前の持っていた能面を埋めたことに由来する、⁽⁷⁾というものである。そして、野箱には千手前の墓(傾城塚)があり、墓印の松(傾城松)があったが、寛文年中(一六六一〜一六七三)に落雷で焼失し、今はもうない。更に、千手は母が千手堂村の千手寺にある千手観音に祈願したので生まれたとされ、千



境に当たる。道路を挟んで流れる寺谷用水が注ぐ田畑に囲まれた場所で(写真③)、祠の内に石碑が立ち、現在では位牌も掲げられている。この位牌は元は

手寺には千手の持仏があるという。これらの言い伝えは近世の地誌・随筆にも記載されており、管見の内でもっとも古い『古老物語』は享保二(一七一七)年著述というから、十八世紀初期には確認できる伝承である。

傾城塚(写真①②)は、字は野箱に位置するが、同時に字・白拍子との



写真④

真正寺^①にあったが、廃寺になるとともに祠内に移されたという。ここでは現在でも、自治会と顕彰会が中心となって千手前の供養祭（写真④）が行われている。さほど広



写真③



写真⑤



写真⑥

合わせ、扇を手に可憐に舞う（写真⑥）。今では地元酒造会社の商品化や観光化・教育的題材として千手前は顕彰され、一環としてこの供養祭も長野地区全体で行われているが、五十年ほど前は野箱の住民のみで行っていたのだという。一九六〇年代に歴史に関心の強い市長の努力もあり、傾城塚が整備され、市で「つ」にも力を入れると同時に、顕彰会も発足された。現在、男性主体で盛り立てられている印象のある千手前であるが、それでもなお、地元女性たちにとっては特別な心情があるようで、定期的な掃除など、心配りと手入れが窺えた。それもそのはず、この傾城塚は祈願すると「おこり」が落ちるとされ（図・千手前碑）、供養祭に参列した女性は、「此処にお参りすると綺麗な女の子が

くはない傾城塚敷地内に三十名程の関係者が参集すると、正眼院（元真言宗、現曹洞宗）住職による読経が始まり（写真⑤）、参列者の焼香を経た後、長野地区小学生女兒八名が創作舞踊を幕前で披露する。和装姿の女兒たちは千手前を題材にした歌詞にピアノをつけた曲に



生まれる」と明治生まれの姑から言われた、という話をしてくれた。このように、千手前は地元の女性にとつては美

が、一方でやはり天竜川が暴れる度に寺谷用水は決壊し、野箱・白拍子・千手堂を始めとする村々は、普請の必要が生じた⁽¹⁵⁾。現在の寺谷用水は、道を挟んだ場所に深くコンクリート固めされた水路となっているが、昭和十一年生の方が語るところでは、傾城塚が整備される前、五十年くらい前の幼少の記憶では、用水は塚の横の土手を通り、きれいな水が流れていた。塚周辺は手つかずの茂み状態、鬱そうとした田畑の中に石塔があり、近寄りたがたい雰囲気だった、という。

また、次のようにも伺った。野箱より白拍子の方が低地で、寺谷用水から水があふれると白拍子側に流れていくが、周囲より少し小高くなっている傾城塚辺りだけが自ら顔を出して浮かぶ島畑になった、というのである。今では枯失した松だが、伝説とともに人々にとつて記憶されうる存在だったことは、この千手（傾城）の松にまつわる次の話からも窺えるであろう。

徳川家康はよく鷹狩りをした。ある時、中泉御殿で飼育されていた鷹がいなくなつて家来が焦つていたところ、「千手の松にいますかもしれない」と探してみると、その通り、松に止まっていた。

傾城松はその存在感から、周辺の人々にとつては距離・位置を計る大切な目印、目安であった。ならばこそ、滲み出る傾城松焼失に対する口惜しさは如何ばかりであろう、それは、文献で重ねて記述される一文からも読み取れよう。

字境であるのと同時に、水際という境界に位置する千手前の墓

女に繋がる信仰対象でもある。さて、実際その傾城塚の地に立つと気になるのが、農業用水の存在である。聞く所によると、近世初期に開削された寺谷用水は、当地を穀倉地帯へ導いたという。この寺谷用水を始め長野地区の歴史を振り返ると、天竜川との関わりは避けて通れない。

天竜川は「暴れ天竜」という異名からも分かるのとおり、度々激しい洪水を起こしてきた川である。古く長野地区は、草嶺から南方面は海だったといい、また天竜川の支流が網目状に乱流し、氾濫が起きる度に小高いところは島状に残ったことは、字名にも名残が窺える。本流は元々池田宿の東を流れていたが、明応七（一四九八）年の今切大地震で河床が隆起・陥没して地形が変わり、流路は変更し、以後川筋も落ち着き開拓が進展したことが、米の生産高増加に繋がることになった。近世に造営された寺谷用水によつて長野村も潤った

(傾城塚)。先に示した神戸の祇王や前橋の静御前の伝説事例を鑑みても、この墓に対する人々の信仰にはやはり注意が必要と思われる。聞き取りでは明確にならなかったが、水害に苦しめられた人々が千手前に寄せた期待―土地の一切、田畑も人家も時には人命さえも攫さらつていく荒ぶる水を鎮め願う心情を込め、その御魂を慰霊した、ということが全く無かつたとは言ひ切れまい。氾濫でさえも、ぼつかり浮かぶ傾城塚、そして健全と立つ傾城松に、人々は何らかの感情、特別な感慨を抱くのは自然なことだからである。加えていえば、『遠淡海地志』⁽¹⁶⁾の傾城塚の項目に突如記された、「寺谷井奉行の書付」なる存在も、寺谷用水の管理と千手前伝承の間に何らかの介在や影響があつたことを推察させる。

江戸時代後期には、仿僧川のかけ替えがあり、また用水もだいぶ整理され、一帯が水害に苦しむことは少なくなつた。住宅が増え辺りの光景も変貌した中で、時代に則し伝説の受容、扱われ方も変遷する。現在は先に述べた通り、千手前という存在は文芸に基づく女性、観光や郷土の歴史を見つめる題材となつている。しかし、かつての地域の歴史に彼女の存在を落とし込んでみると、まさに水際において命がけで生きていた人々にとつて身近な存在であつたことは、天龍川やその水を引く農業用水の恩恵と被害の狭間でせめぎ合う人々の生活や風景から浮上する。

伝説は、時に土地の記憶を呼び起こす装置となる。本来の地形が露わになる自然災害においては、なおさら切実に人々の心意や祈りが際立つものとなる。伝説を語り伝える意義は、取り

巻く環境を歴史的・風土的に読み解くことでいつそう意識されてこよう。そう自覚した時、伝説をどのように継承していくか、という問題はそこで生きる知恵として大きな責務を担っていることにもまた、気づかされるのである。

四 おわりに

白拍子伝説と水は、半ば、切つても切れない関係であつた。その伝承の背景には、治水や利水といった現実が控えていた。その先に結びつく農の営み、伝承が醸成される筋道について、少し考える必要がある。背景には、白拍子の本質が関わりと推測するからである。

「白拍子」を語る上で欠かせない歴史人物の一人として、後白河法皇が挙げられる。今様の生活を振り返りながらその歌い方や伝承などを記した『梁塵秘抄』を繙くと、「口伝集」巻第十四に「水白拍子」⁽¹⁷⁾の文字を捉えることができる。沖本幸子氏はこの一節について、荒んだ風景や心境にふさわしいものとして「白拍子草」があつた可能性を示唆する。水に関わる文言はこれのみでなく、白拍子の歌謡を記す『延年連事并舞式』「白拍子ノ歌 金殿」⁽¹⁹⁾では水の徳を称え、『今様之書』「十八 祝曲」⁽²⁰⁾では水を集めた物尽くしや「昆明池の水」という詞章が見られる。「昆明池の水」といえば、『五節間野曲事』「水猿曲 或号「水白拍子」⁽²¹⁾」にも表れ、更にそこにある「しんむしようの曲」は、早魃の折に静御前が大雨を降らせた雨乞いのための白拍子舞の曲でもあつた。⁽²²⁾

かねてより、気になっていた点がある。「七十一番職人歌合絵」
「四十八番」²³にある歌が、

しらひやうし

所くくひく水は 山田の井どのなほしる

と、白拍子に仮託される中で水田風景が詠じられていることである。この歌は『閑吟集』や狂言「鳴子」の歌を引用したとされるが、まずは白拍子と田園が結びつく所に、何らかの根拠がなければなるまい。そこで連想するのが、白拍子が農に向ける関心である。傀儡子の乙前や白拍子をはじめ、芸能者との交流を盛んに持った後白河法皇が田歌を習う様子が『梁塵秘抄』の中で描かれる。ここから測り知れるのは、当時の芸能者たちが、民の生活光景や世相や流行に対しても常に敏感かつ積極的に興味を抱き吸収していた点である。そして、その者たちを通じ世間の様相や感情を窺う権力者という構図が垣間見える。

中世から近世の小唄との関わりで白拍子の姿容を見ていく必要を石黒吉次郎氏は指摘したが、併せて、私は農民に享受される過程を捉えることも重視したい。例えば、『田植草紙』「朝歌二番」²⁶には、

一 鶯くまいあがれ 鼠焼いて突き上う

白拍子殿こそ 舞の手の上手よ

一手ならおう 金剛兵衛が舞の手

まいわ舞たが 後の小歌をわすれた

と白拍子が登場する。その理由を考えると、民に白拍子という存

在が浸透する段階で付される祈願や期待、呪術というものが自ずと浮上する。それは、白拍子の本質を根本とするものといえよう。つまり、図像で周知される、袖を翻し足を踏んで拍子をとる白拍子舞の芸態の力強さを大地に還元したとき、地に這う悪霊を封じ祓う様子が連想され、あるいはまた、良くも悪くも潤沢な水を前にしたときには、地を清め新たな息吹を召喚する聖なる女性と白拍子を見なし、その呪力を頼みとする—そのような連結があったように思われる。全国各地に点在する「白拍子伝説」が低湿地や峡谷な土地の地名と結びつくこと、治水・利水など農業との関連が特徴として見出せる点は、そのような理由であろう。

折口信夫は水辺の女性を考察する論考「水の女」で、古代女性の聖性と水辺での役割、禊ぎを説いた。時代が下るにつれ、その任務は希薄にはなっても、残存ともいべき形跡が白拍子伝承の様相に照射されているように見受けられる。水辺における荒廃からの再生、荒ぶる水を治め肥沃の大地を保證する女性として、現実的な機能、いわば稲作の実りを誘導するという農業生産に向けた発想が「白拍子」という名称を冠することで果たされるように、と託す心意が表れている。

今回取り上げたのは近世の伝説であったが、通底する意識には古代の残像が浮上した。芸能者、とりわけ水と強固に繋がる白拍子が保持する呪力は、中世における社会的立場のみならず、近世社会での在り方においても、実に多角的な姿を表している。白拍子は忽ちに変容した、とされながらも、実像から離れても

なお享受・派生されるその多様性こそが、実は白拍子の芯をなす一面でもある、といえまいか。

注

(1) 『吾妻鏡』第三

●元暦元年四月廿日戊子。雨降。終日不_レ休止。本三位中将依_二武衛御免_一有_二沐浴之儀_一。其後及_二秉燭之期_一。称_レ為_レ慰_二徒然_一。被_レ遣_二藤判官代邦通_一。工藤一藤祐経。并官女一人号_二千手前_一。等於羽林之方_一。剩被_レ副_二送竹葉上林已下_一。羽林殊喜悅。遊興移_レ剋。祐経打_レ鼓歌_二今様_一。女房彈_二琵琶_一。羽林和_二横笛_一。先吹_二五常楽_一。為_二下官_一。以_レ之可_レ為_二後生楽_一。由称_レ之。次吹_二皇覺急_一。謂_二往生急_一。几於_レ事莫_レ不_レ催_レ興。及_二夜半_一。女房欲_レ帰。羽林暫抑_二留之_一。与_レ盃及_二朗詠_一。燭暗数行虞氏涙。夜深四面楚歌声云々。其後各帰_二参御前_一。(後略)

●文治四年四月廿二日戊子。入_レ夜。御台所御方女房号_二千手前_一。於_二御前_一絶人。則蘇生。日来無_二指病_一云々。及_二暁_一。依_レ仰出_二里亭_一云々。

●文治四年四月廿五日辛卯。今暁千手前卒去。年廿四。其性大穩便。人々所_レ惜也。前故三位中将重衡参向之時。不慮相馴。彼上洛之後。恋慕之思朝夕不_レ休。憶念之所_レ積。若為_二発病之因_一歟之由。人疑_レ之云々。

『新訂増補国史大系(普及版) 吾妻鏡第一』黒板勝美

編 吉川弘文館 一九六八

(2) 『平家物語』卷十「千手前」

(前略) よはひ廿ばかりなる女房の、色しろうきよげにて、まことにゆうにうつくしきが、めゆいのかたびらにそめつけのゆまきして、ゆどののをおしあけてまいりたり。(中略) 三位中将守護の武士にの給ひけるは、「さても只今の女房は、ゆうなりつるものかな。名をば何といふやらん」ととはれければ、「あれは手_二こしの長者がむすめ_一で候を、みめかたち心ざま、ゆうにわりなきもので候とて、この二三ねんめしつかはれ候が、名をば千手の前と申候」とぞ申ける。その夕雨すこしふて、よろづ物さびしかりけるに、件の女房、琵琶・琴もたせてまいりたり。(中略) 千手酌をさしおいて、「羅綺の重衣たる、情ない事を奇婦に妬」といふ朗詠を一両反したりければ、三位中将の給ひけるは、「この朗詠せん人をは、此生ではすてられ給ひぬ。助音してもなにかせん。罪障かろみぬべき事ならばしたがふべし」との給ひければ、千手前(中略)又「一樹のかげにやどりあひ、おなじながれをむすぶも、みなこれ先世の契」といふ白拍子を、まことにおもしろくかぞへすましたりければ、中将も「燈闇しては、数行虞氏の涙」といふ朗詠をぞせられける。(中略) 千手前はなかくに物思ひのたねとやなりにけん。されば中将南都へわたされて、きられ給ひぬときこえしかば、やがてさまをかへ、こき墨染にやつれば、信濃国善光寺におこなひすまして、彼後世菩提をとぶらひ、わが身も往生の素懐をとげけるとぞきこえし。

『日本古典文学大系三三 平家物語下』高木市之助・小澤正夫・渥美かをる・金田一春彦校注 岩波書店 一九六〇
〔源平盛衰記〕卷三十九「重衡酒宴 附千手伊王の事」

(3) (中略) 中将人を召して、「夜部の女は如何なるモノぞ」と尋ね給ひければ、「白川宿の長者の娘千手前とて、今年二十に罷成る、当時は鎌倉殿のきり人にて、御気色よき女房也」とぞ申しける。(中略) 千手は榊葉と云ふ美女を具し、伊王は結四手と云ふ美女を共にて、今年の卯月の一日より明年の六月上旬迄、打替りく参りつゝ、御宮仕ぞ申しける。楮中将南都に渡されて斬られ給ひにしかば、二人の者共さしつどひて、臥沈みてぞ歎きける。(中略) 二人相共に佐殿に参りて、「故三位中将とのに去年より相馴れ奉り、其面影忘れ奉らず、後世を助くべき者なしと歎き仰せ候ひき、見参に入り侍りけるも然るべき事にこそ候ふなれば、暇を給り様を替へて、菩提を助け奉らん」と申しけれども、其赦しなければ、尼にはならざりけれ共、戒を持ち念仏唱へて、常は弔ひ奉りけり。中将第三年の遠忌に当りけるには、強ひて暇を申しつゝ、千手二十三、伊王二十二、緑の髪を落し、墨の衣に裁替へて、一所に庵室を結び、九品に往生を祈りけり。中将は狩野介に具せられて、且く伊豆におはしけり。
『校注国文叢書八 源平盛衰記下』池辺義家編 博文館 一九一四

(4) 『古老物語』七十七「豊田郡池田庄野箱村千寿」

豊田郡池田庄野箱村白拍子千寿前有廟所千寿前駿州手越

長娘也其母久無子遠江千手観音祈而儲子也千手名平重衡刑戮後尼成当国蟄居故其処呼白拍子所葬墓印松植世人傾城松云四百年後寛文中為雷火枯也其跡有石塔と、本書では謡曲の影響か、千手前を「駿州手越の長者の娘」と述べる。

『古老物語注釈』山下熙庵著 喜多川貞男編刊 二〇〇五

(5) 一説に、熊野御前の侍女・朝顔は、千手前と熊野御前との連絡を取り持ったという。『遠江国風土記伝』巻第七の前野項には、

●阿佐賀保塚、昔処女阿佐賀保、(湯谷之女侍従同時)死葬于茲田中古墳存焉、其田字云阿佐賀保

と記される。また、熊野御前所縁の池田宿・行興寺は「時宗」の寺であつたとされる。当地では他に、平清盛建立とされる寺が点在するが、平家に関わる一連の女性伝説の伝播・管理者に関して、熊野信仰や時宗といった遊行の宗教者の動向がやはり注目される。

(6) 『遠江国風土記伝』巻第七

○野箱 高百卅九石三斗三升五合

●貞正寺 曹洞宗小嶋村正眼院末、平僧住

●千手女之塚、曰傾城塚、有傾城松

○千手堂 高五百五十五斗六升

●千手寺観音堂、朱符之寺田高貳石、山下熙庵遺書曰千手寺観音者、白拍子千手女ノ持仏也、重衡死罪後、

千手女為尼、来住于遠江、謂其住所曰「白拍子村」、死後葬埋、号傾城塚於其所植松名傾城松。

●東鑑卷八文治四年廿五日、千手前卒去年廿四 ○猿楽謡物曰手越長之女トイヘリ

○白拍子 高百廿石五升三合

●正光寺、曹洞宗岡村聖寿寺末、平僧住

古老曰昔処女狀況、為白拍子之歌舞、故負名

熙庵曰昔重衡死後白拍子千手女住于是処、故曰白拍子村為尼而死、葬埋野箱、傾城塚傾城松是其遺跡也
(注千手堂村野箱村)

『遠江国風土記伝』内山真竜著 谷島屋書店刊

一九〇〇

(7) 『見付次第』第一卷

千手堂の村名旧は法楽といひしと、野宮の地能の面を埋し地にて千寿のもてるものなり」と村民申居り。

『見付次第』山中共古著(明治四五年柳田國男書写、昭和十一年中道朔爾借写)

(8) 『古老物語』(享保二年序)山下熙庵著、『遠江国風土記伝』(寛政元年)内山真竜編、『遠江古迹函会』「千手ノ前碑」(享

和三年)藤長庚著、『遠淡海地志』(天保五年)山中豊平著、『見付次第』第一卷(明治三十八年)四十年の見聞録)山中共古著。

(9) 天龍川下流左岸へと南流する農業用水。徳川家康は遠江を

掌握すると新田開発を推進、天正十六(一五八八)、命じ

られた伊奈忠次(徳川家康代官頭)は土豪平野重定の協力を得て天龍川の一支流を開削。周辺七三村の灌漑用水を整備され、土地の生産性は向上した。寺谷地内に大塚(杵堰)を設け天龍川の水を引き入れ、遠州灘沿岸の浜辺村まで三里余の大井堀を掘る。井組は村名単位で七五ヶ村、一千石を一組として十四組構成。

(10) 『見付次第』第一卷

○見付より一里余、中泉より西南に当り、白拍子千寿の墓ありといへば見に行たり、野宮村といへる小村あり、此村に千手堂といへる千寿の守り仏を本尊にせしといふ堂あり、近年の建築河口も古きものを不見、火災に逢いしとの事、墓地には元禄の年号刻しある墓地あるのみ、此所より五六丁畑中に千寿の石碑といふあり、拓き見たれど不明なれど、寛文十二年に建たること読得らる、高五尺程左図の如き四角の塔なり、正面に輻松樹頌信女とありて、下に九行二十字詰の文字刻しあれど、磨滅読兼候のみ、此地に千寿松といふありし跡に此塔を立し文意なるを判しよみ得たり、小寺あり、真正寺といふ、無住位牌には

婦真城松樹頌信女 靈位

とあり、此地国の拾六番の札所と見へ、掛りたる額に御詠歌記るしあり、

来て見ればこ、そ千寿の庭の松幾世かわらむ法の色かなとあり、この歌によれば千寿の庭の松と云ひ伝へし松ありし地と見ゆれば、千寿の墓といへるは誤りなり、(後略)

(11) 正眼院塔頭。廢寺後の昭和五十五年、敷地には公民館が建つ。

(12) 命日は四月二十五日とされ、その日には野箱十五・六軒のうち一家から一人、主におばあさんが眞正寺に集まり、念仏や御詠歌を唱え供養したという。現在では期日に近い休日を実施する。平成二十三年は四月二十九日。

(13) 『遠江古迹図会』二「千手ノ前碑」

一 中泉の南在、一里隔てて野宮村有り。この処に往古、平重衡の寵愛せし千手の石碑有り。この向ひの村を白拍子村と云ふ。この千手、白拍子なれば号けたりしなり。また近辺千手堂とて、千手観音を安置せし堂有り。千手観音の申し子なれば千手と名付けしとなり。墓の前、傾城松と云ひて松の大木有りしが、四十年前以前枯れたるとなり。石塔も昔の石塔はなく、今の碑は寛文年中再建す。この碑、畑の中に小松の林有りてその中に有り。外に石塔多く有り。人を知れず。所の者名付けて傾城様と云ひ、瘧の立願懸くる。果して落ちると云ふ。竹の切掛を献ずる。墓の右の方に小宮有り。この宮の中にかくのごとき物有り。先年の石塔の宝珠なる由。その石塔、洪水の節流れたる由云ひ伝ふ。所の者に尋ねたれども知らず。石塔左の方に、寛文十二壬子とばかり見ゆる。碑の裏に「仏身法身猶如虚空」と云ふ字有り。表に戒名「軌松樹傾信女」と云ふ字有り。この軌の字、城の字の古字と思はる。按ずるに、傾城松枯れて傾きたれば、傾城松樹の四字を交へて新戒名名付けたる

物ならんと見ゆ。所の者云ふ、この大木の松を売りて、その金にて石碑再建すとも云ふ。『東鑑』に曰く、千手、文治四年四月廿五日二十四歳にして卒と有り。謠本には、駿河国手越の長の娘と云ふ。遠州の産なる事なし。何にしてもこの古跡は疑はしき物なり。ただ俗説のみにして始終連続せざる事ども、取るに足らず。

『日本名所風俗図会』五 東山・東海の巻 角川書店 鈴

木棠三編 一九八三

(14)

天龍川・長野県諏訪湖を源に、長野・愛知・静岡三県を流れ、遠州灘に注ぐ。流路は何度か変遷し、伴つて東海道の交通路も変転した。下流一帯を占めた池田荘(京都・松尾神社領荘園)は初め天龍川を東限とした。長野地区は天龍川の支流が網の目に乱流し洲や島が点在する地域にあたる。明応七年の今切大地震で河道が落ち着き(本流が池田宿の東から西側へ移動)、以後開拓も進展した。

(15)

臨時乍恐以書付奉願上候 大井通之内、切所、地付野箱二而築不申候二付、御願

一 寺谷用水、大井通之内、北条安房守様御知行所、豊田郡野箱村地内、囲堤井土手共、去四年中、天竜川満水之節、押切申候処、右村方より御願申上、今般、囲堤八国役御普請、被仰付候由而、此節、皆出来相見へ申候得共、井土手御普請、無御座候付、用水差支相成候間、先規之通、井土手普請、早々取懸致呉候様、右村方正申談候処、(中略)以上

寛政二年戊三月

寺谷井組物代物頭

東平松村 万太郎

小島村 長左衛門

上岡田村 利左衛門

中泉御役所

『磐田市資料叢書一 自然災害資料』磐田市教育委員会

編・刊 一九九七

(16) 野箱村 (中略)

一 傾城松 俗伝ニ、**千手前墓**トモ。

石塔有り。傾城松傾信女 六尺余有ル也。

(中略) 重衡刑戮後、遠江池田庄ニ蟄居ス。其所ヲ人

白拍子村ト云。死葬所ヲ野箱村ト云、傾城松ト

云。四百有余年ノ後、寛文年中雷火ニ而焼。

助右衛門

先年寺谷井奉行ニテ、伊奈備前守諸書付有テ勤ル所

焼失イタシ、当時中泉御代官御預ト成ル。堀ハ落

棹式間壹尺五寸也。

『遠淡海地志』山中豊平著 山中真喜夫編・刊 長田文

化堂刷 一九九一

(17) 仁安元年十一月(中略)、今様の會構式などにも、人のあつまりたるをゑらみて召よせに俄に唱などして會構中ばにしてたえぬ。のこりの人たゞひとなき家にすむことく、乱舞にして水白拍子唱てかへりぬ。(後略)

『岩波文庫 新訂梁塵秘抄』佐々木信綱校訂 岩波書店

一九四一改版

(18) 『白拍子・乱拍子の声―歌声の脱雅楽化をめぐる―』『日本文学』五三一―七

(19) 姑射山ノ裏ニハ嵐万歳ノ名ヲ呼バセ、南陽ノ軒ノホトリニハ、水千年ノ徳ヲアラハス、七ツ徳ヲホメケルハ、白雲黄竹ノ歌ノコヘ。

『国文東方仏教叢書 文芸部』東方書院 一九二八

(20) 嘉辰令月之春之霞、何重カ空ニタチヌラン、万歳千秋之秋之風、ナヒカヌ草木ソナカリケル、

凡吾キミノ徳ヲヲモエハ、太宗之政代ニコトナラス、

無民之メクミヲ尋ヌレハ、唐堯之明時ニ相同、夜之雨ヒソ

カニウルヲセハ、四方ノ梢ニ華開キ、曉之風ユルクフケハ、

枝ヲナラサ、リケリ、誠ニメテタカリケル、今之御代哉ヤ

レク

サレハ昆明池ノハル水、恩波ニモルノ民モナク、

コヤサンノ秋ノ月、光ヲ仰カヌ人ソナキ、上ニ明王マスト

キハ、下ニ徳ヲソウタウナル、子日ノ野ヘニ引松モ、マタ

フタハナルミトリヨリ、ミキハニナル、鶴ノ子ノ、ソタ、

ンスエニイタルマテ、ツキセヌ千代ノケシキ哉ヤレク

『日本庶民文化史料集成第二 田楽・猿楽』芸能史研究

会 三一書房 一九七四

(21) 水のすぐれておほゆるは 西天竺の白鷺池 しむしやう許由にすみわたる 昆明池の水の色 行末久しくすむとかや

賢人の釣を垂しは 蔽陵瀬の河のみづ 月影ながらもる
なるは 山田のかけひのみづとかや 蘆の下葉をとづるは
みしま入江のこほり水 春立空の若水は くむともくむ
とも つきもせじ つきもせじ

『群書類従 公事部』塙保己一編 続群書類従完成会

一九六〇

(22) 『義経記』 卷第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」

(前略) 神泉苑の池にて (中略) 静が舞ひたりけるにし
んむじやうの曲と云 (ふ) 白拍子を半らばかり舞ひたりし
に (中略) 八大龍王鳴り渡りて、稲妻ひかめきしに、諸人
目を驚かし、三日の洪水を出し (後略) 』

『日本古典文学大系三七 義経記』岡見正雄校注 岩波書
店 一九五九

(23) 『新修日本絵巻物全集二八』森暢 角川書店 一九七九

(24) 『梁塵秘抄』「口伝集」卷第十

保元二年の年、おとまへが歌を、年頃いかで聞かむと思
ひし物語をし出たりしに、(中略) 正月十日余りばかりに
参りたりき。(中略) うたの談義ありて、(中略) 足柄より
はじめて、大曲様、旧古柳、今様、物様、田歌等に至るまで、
未だしらぬをば習ひ、もと歌ひたる歌ふしたがふを、一筋
に改め習ひし程に、是彼や様々もしりにき。(後略)

(25) 『白拍子をめぐる二三の問題』『専修国文』五五 一九九四

(26) 『新日本古典文学大系六二』田植草紙・山家鳥虫歌・鄙廼

一曲・琉歌百控』岩波書店 一九九七

参考文献

・『磐田市誌上・下』磐田市誌編さん執筆委員会 臨川書店

一九八七復刻

・『磐田市誌シリーズ第八 磐田の新田開発』磐田市編・刊

一九八七

・『磐田市誌シリーズ第十 天龍川流域の暮らしと文化 上・下』

磐田市編・刊 一九八七・八九

・『磐田市史 通史編上・中』磐田市史編さん委員会編 磐田市

刊 一九九四・九一

・『豊田町誌 別Ⅱ 民俗文化史』豊田町誌編さん委員会編 豊

田市刊 二〇〇一

・『磐田市市制施行五十周年記念長野地区記念誌 わが邑長野』

長野地区自治会・公民館編著、一九九八

・『磐田ことはじめ一 町内の風土記』熊切正次著・刊

一九九五

・『地名用語語源辞典』楠原佑介・溝手理太郎編 東京堂出版

一九八三

・『職人歌合総合索引』岩崎佳枝・長谷川信好・山本唯一 赤尾

照文堂 一九八二

謝辞 本稿の作成にあたり、磐田市の斉藤正志氏・堀内健吾氏
をはじめ、関係各位・団体に資料提供および探訪調査でご協
力賜りました。記して御礼申し上げます。

(ないとう・ひろよ)